

わたっています。いいかえれば後方支援の技術者集団でした。ちなみに編成時の兵器装備は銃剣がほぼ人数分の327挺、小銃にいたっては24挺で、威力が強い重火器類はなく、戦闘部隊とは程遠いものでした。

【宮崎での訓練を経て、門司へ、そして那覇に上陸】

日記は1944年3月22日から始まります。22日から25日までは出発までの準備期間とし、25日から正式に宮崎県都城で動員され、軍事訓練が始まります。訓練の中で目立つのは潜水艦に関する記述で、「対空のかんし(監視訓練)や「潜望鏡を出す」タイミング、時間、波風が高い時の注意など、具体的な内容が記されています。

4月10日に宮崎を出発し、一路門司へ向かい、輸送船富山丸に食糧や物資を積み込み、長尾さんたちの部隊も乗船します。しかし、その船内の状況は「非常に艦内せまく兵同志(ママ)が寝るのに困難す 温度(ママ:湿度か)80度くらいにて汗びっしょりになる」という、過酷なものでした。出航したその日「敵潜水艦を監視してから船は航行す」「夜は救命具に身を固め就寝す」という記述があり、いつ攻撃をうけても海に飛びこむ準備をしていました。船は鹿児島港で5日待機しますが、この待機中のほぼ毎夜「演芸会」が催されました。出発を待つ船内で、唯一の楽しみだったのかもしれない。



門司港出征の碑(門司港そば)

要塞建築勤務第6中隊が出発した門司港は、戦争が起こると兵士や物資を輸送するための軍事中継基地となっていました。日中戦争が始まった1937年には、出征部隊の発着回数が488回を数え、普段の貿易港とは異なる賑わいを見せるようになりました。さらに戦争が長期化する中で東南アジアの戦線へ将兵とともに移動した軍馬がどれほどいたかは定かではありません。

そして4月19日夜中の12時に出発した船は大きく揺れ、奄美瀬戸内に一時停泊し、さらに南に向かいますが、「敵の目の逃れる為に」船団は方向を逆戻りして進路を「取って、」しっかりと船団を組んで危険を逃れつつ南へ南へ進んで」とあり、航行にあたっての緊迫感がひしひしと伝わってきます。鹿児島島を出港して3日後那覇に到着しました。

長尾さんたちの部隊を乗せて来た富山丸はこの2か月余りあと、44年6月29日米潜水艦によって撃沈し、乗船部隊約4600人中、約3700人が死亡しました。

【伊江島飛行場建設】

4月22日、無事に那覇港に到着した6中隊は6日後伊江島に移動し、作業を開始します。徴用小屋建設、トロッコ線路の敷設、慰安所建設のための足場づくりなどを進めていきました。沖縄戦では現在判明しているだけで147の慰安所が設けられ、多くの場合は民家などを接収して利用していました。命令により仮慰安所設備を急造したという記述があるように、伊江島では6中隊が建設にあたったことが別の資料からも明らかになっています。

7月28日までの約2か月余り、伊江島飛行場建設に関連する工事作業を終え、読谷に移動してきた第6中隊は10月に入ると中飛行場(嘉手納)に駐屯していた第44飛行場大隊関連の工事に入ります。沖縄戦開始の8か月前のことでした。

(つづく)

(瀬戸)

【参考文献】

- ・「恩納村史 第三巻 戦争編」(2020年)
- ・「読谷村史 第五巻 資料編4 戦時記録下巻」(2004年)
- ・「沖縄戦が問うもの」林博史(2010年)
- ・「要塞建築勤務第6中隊陣中日誌」(アジア歴史資料センター)
- ・「要塞建築勤務第6中隊陣中日誌 編成装備の参考」(アジア歴史資料センター)